

世界のクリ生産の動向について

—— 温帯ユーラシアの東部と西部の比較 ——

元木 靖

【要旨】

ブナ科の「クリ属」に属するクリの食用生産地は、今日、世界の大部分が温帯ユーラシアの東部（東アジア）と西部（地中海北部地域を主としたヨーロッパ）に分布する。本稿では世界におけるクリ生産の動向について、最近 50 年間の統計を整理し、時間的および空間的な変化の方向性を明らかにするとともに、クリ生産を規定してきた社会経済的な背景について理解するため、先学による研究成果にもとづき全体的な考察を試みた。ヨーロッパについてはイタリアと南フランスの状況について紹介した成果を収録し、また東アジアについては韓国と中国の状況について文献および現地調査にもとづき検討した。

【キーワード】 世界のクリ生産，時空間変化，ユーラシア，地中海ヨーロッパ，東アジア

1. はじめに

本誌「経済学季報」において筆者は、「日本列島におけるクリと人間とのかかわり合い」、「グローバル経済下における日本のクリ生産の動向と栽培技術革新」、および「中部日本におけるクリ菓子産業の地域的集積」について報告してきた（元木，2007，2008，2009）。

本稿では日本のクリ生産の動向を広い視野から位置づけるため、世界のクリ生産の動向を把握するとともにその背景について確認したい。クリ¹は、ブナ科のクリ属に属し、北半球の温帯に自生する。また地域の風土・環境に適応した特性を有し、大きく日本栗、中国栗、ヨーロッパ栗、およびアメリカ栗の4種に分類されている(田中, 1933; Woodroof, 1979; 中川他訳, 1989; 農山漁村文化協会, 2000)。ただ、アメリカ栗は第二次世界大戦前に病虫害の影響で消滅しており、今日では、中国栗と日本栗を主とした東アジアと、ヨーロッパ栗を主とした西ヨーロッパの地中海北部地域、すなわちユーラシアの東西の地帯に集中的に分布する。したがって、本稿ではこうした地域性をふまえ、二つのクリ生産地を対比しつつ、世界におけるクリ生産の動向を検討する。具体的には、まずFAO統計資料をもとに1961年から2011年までの最近50年間の動向を明らかにし、つぎにその社会経済史的な背景について文献資料および現地調査をもとに検討する。

2. 世界のクリ生産の動向

2-1. 全体的な傾向

FAO統計によると、世界のクリ生産量は1961年に594,098トン、2011年現在では2,014,736トンと推定されている。この50年間に約3.4倍に増加したことになる。しかし、クリ生産はこの間一貫して増加してきたわけではない。'60年代には50万トン～60万トン台で推移していたが、'70年～'80年代になると50万トン前後に低迷した。ところが'90年代に一挙に増加に転じ、とくに2000年代以降になると飛躍的な増加を示し、今日の200万トン台という状況をもたらされたのである(図1)。1960年代から今日にいたるこの半世紀間は、世界経済が高度成長をとげ、さらに経済のグローバル化が進行した時期であるが、クリ生産においても巨大な変化が生じた。

¹ 「クリ」の表記は、固有名詞的な表現あるいは原論文などで「栗」が使われている場合を除いて、原則としてカタカナを使用した。

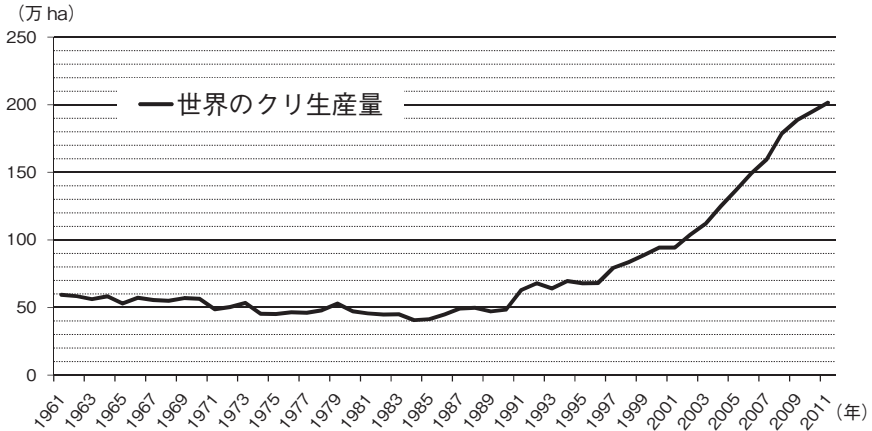


図1 世界のクリ生産量の推移
(FAOSTATにより作成)

2-2. 主要クリ生産国の動向

世界における主要なクリ生産国の生産動向に注目してみよう。図2は、2011年現在、クリ生産量で世界の上位10位までの中国、イタリア、スペイン、ポルトガル、フランス、トルコ、日本、ギリシャ、北朝鮮、韓国について1961年以降の動向を比較したものである²。

図2によると、クリ生産量の推移の仕方は国によって一様ではない。しかし、全体としては、次のような特徴を指摘することができる。第1は、世界のクリ生産量の動向は基本的に中国の生産量の動向を反映している。中国はこの50年間一貫して世界一位の生産を誇り、とくに1990年代以降におけるクリ生産量の伸びは突出し、他のいずれの国々の場合をも圧倒している。第2に、この50年間に、ヨーロッパ諸国と東アジア諸国との間にクリ生産量の推移に大きな差異が見られる。この傾向は1960年代から'70年代にかけて現れており、たとえば東ア

² これらの10カ国のクリ生産量は、この50年間終始世界の総生産量の90%以上を占めている。

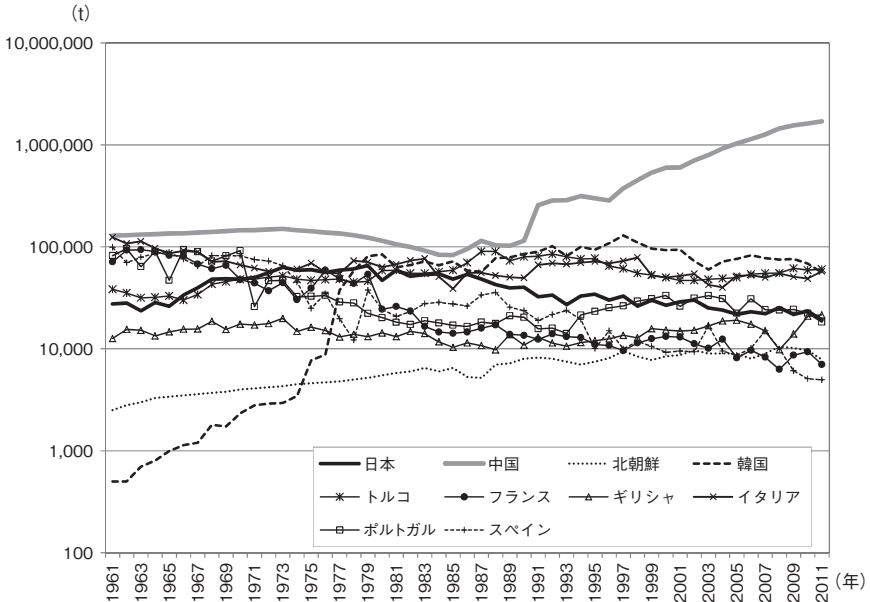


図2 温帯ユーラシアにおける主要クシ生産国の東西比較 (生産量の推移)
(FAOSTAT により作成)

ジアでは生産量が各国共に増加傾向を示していたのに対して、ヨーロッパの場合は停滞的であったトルコ（ここではヨーロッパに含めて扱う）を例外として、全体に減少傾向を示していた。前者の典型例は日本の場合で、日本ではイタリア、スペイン、ポルトガルなどの生産量の上位国が減少傾向を辿る中であって、'60年代後半には生産量を伸ばし、'70年代にはスペインと接近し、中国について世界2位の生産量を有していた。韓国はこの日本を追いかわけるようにして生産を急速に伸ばしてきた（図2）。したがって図1で指摘したように、'70年代から'80年代に世界のクシ生産が停滞、減少をみたのは、かつての上位国であったヨーロッパの諸国がさらに減少傾向を強めた結果である。地域的にみるとこの間東アジアでは韓国が依然として増加を示し、北朝鮮も同様の動きを見せたので、ヨーロッパと東アジアのクシ生産量の比重が交替を示す時期であったといえる。'90年代

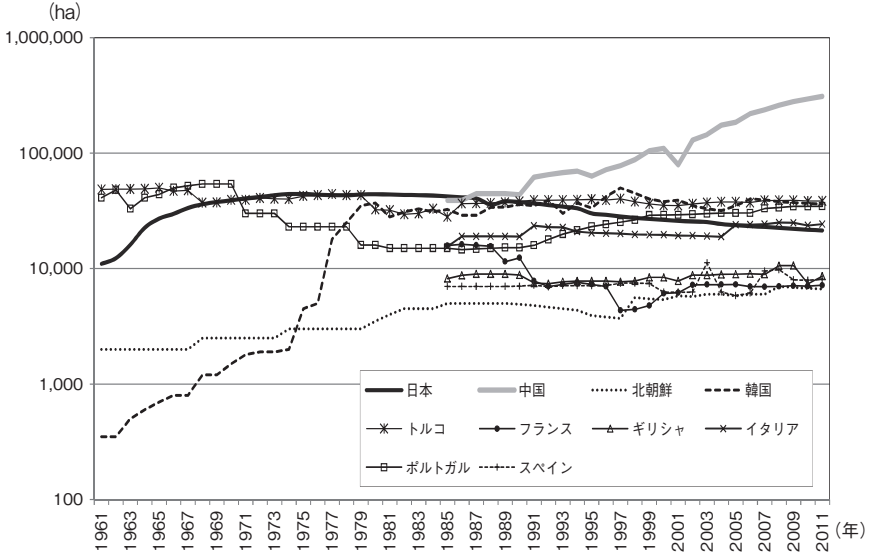


図3 温帯ユーラシアにおける主要クリ生産国の東西比較（収穫面積の推移）
（資料；図2参照）

にはこの傾向はますます明瞭になった。第3に、2000年代に入ると東アジアでは中国のみが突出して生産量を飛躍させ、いっぽう韓国は停滞、日本は微減傾向を示すようになった。

クリの収穫面積の推移も示しておこう（図3）。’80年代以前については中国やヨーロッパのフランス、イタリア、スペインなどの主要国の統計が欠如しているが、基本的に図2に示した生産量の推移にほぼ対応した傾向が認められる。図3によると、1970年代から’80年代にかけて日本が世界最上位の収穫面積を示したこと、およびフランスが’90年代以降さらに減少の一途を辿ってきたことを確認できる。

以上のように、世界のクリ生産は全体的には、1990年代以降の中国の急速な発展によって特徴づけられるが、実際には1960年代にはヨーロッパから東アジアへと比重を移す傾向にあること、同時に最近20年の間に東アジアにおいては

日本をはじめ韓国でも減少傾向が認められることなど、大きな変動を伴ってきた。

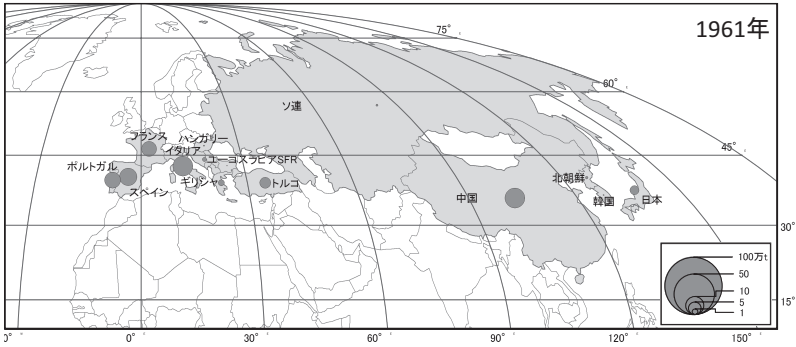
つぎに、世界の主要クリ生産国における生産動向を地域的に確認するため、図 4-(1)(2)(3)(4)(5)(6)を示す。図 4 の分布図には今日の主要クリ生産国の大部分が分布する北半球のユーラシア周辺に限定し、近年クリ生産がみられるようになった南半球(ボリビア、ブラジル、ペルーなど)は省いた。しかし、図 4 を通して世界のクリ生産が北半球の北緯 30 度から北緯 50 度の範囲内の温帯ユーラシアに分布していること、しかもユーラシアの東部(東アジア)と西部(地中海北岸を中心としたヨーロッパ)が舞台となっていることを確認できよう。この東西両地域は世界の現代文明の発祥地域としても注目されてきたところであるが(例えば、中尾, 1978)、クリ生産の中心地域でもあった。

さて、こうしたユーラシア東部と西部のクリ生産動向において、前述のように対照的な差異が生じてきたのがこの 50 年間であった。図 4 (1) 1961 年と (6) 2011 年の分布状況から、クリ生産はユーラシアの西部から東部へとその比重を大きく変化させてきたことを改めて確認することができよう。また図 4 の (2) から (5) において、この間の変動が地域的にいつ、どのように展開したか、すなわち東西両地域の生産の比重が 1980 年代には逆転し、とくに 2000 年代以降に大きな地域差となって現れてきたことが確認される。東アジアの 4 カ国とヨーロッパの 6 カ国(トルコを含め)のクリ生産量が世界全体に占める割合をみると、1961 年当時は東アジアとヨーロッパの関係は 26.8% : 71.9% であったが、1977 年には 51.2% : 46.2% と逆転が起り、2011 年現在では 88.6% : 8.4% となった。

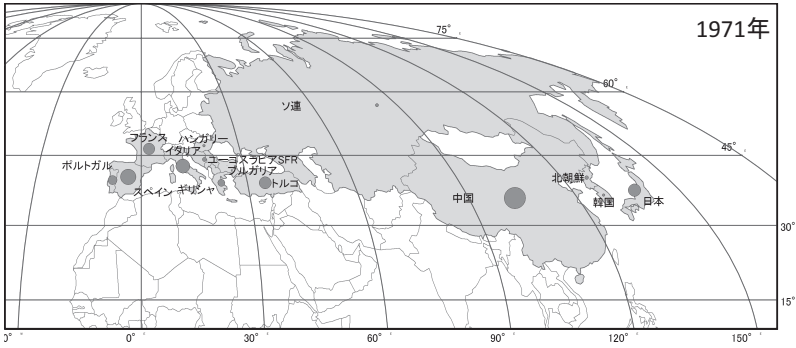
ところで、以上にみた世界のクリ生産地の動向に関して、ヨーロッパの主要クリ生産国は 1960 年代に入ってなぜ減少傾向を示すようになったのであろうか、それとも減少傾向はそれ以前から生じていたのであろうか。また、クリ生産の減少はどのような背景のもとに生じてきた現象であろうか。いっぽう、東アジアにおける日本の減少については筆者も指摘したことがあるが(元木, 2008)、韓国が'60 年代以降急速な増加を示し近年減少傾向に転じたこと、そうして'90 年代以降中国の飛躍的なクリ生産の増加はなぜ生じたのか、しかもこの動きは東アジアの日本や韓国の動きとどのように関連しているのか。

以下、ヨーロッパについては地中海北岸地域のイタリアと南フランスの場合に

(1)



(2)



(3)

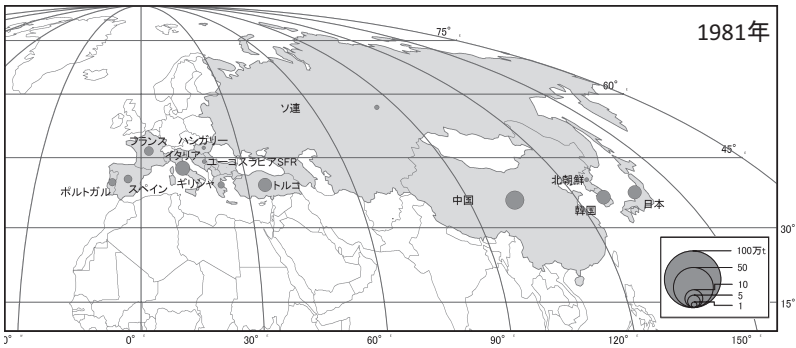
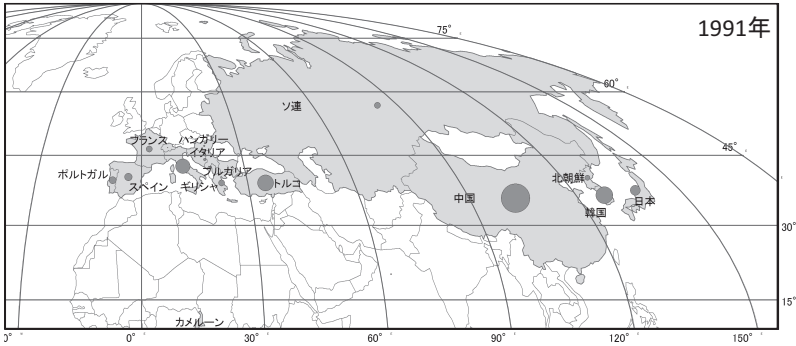
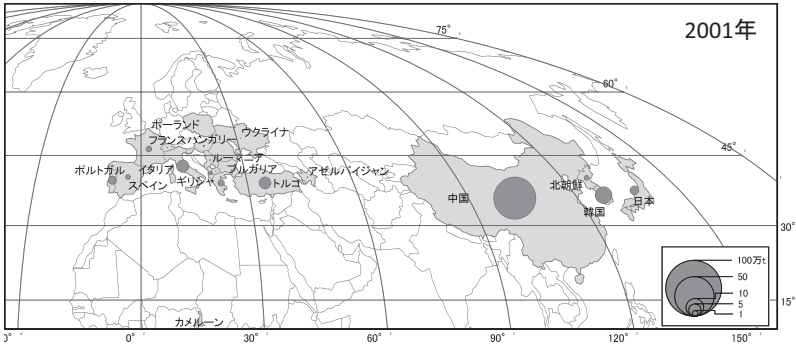


図4 クリ生産量の分布の変遷

(4)



(5)



(6)

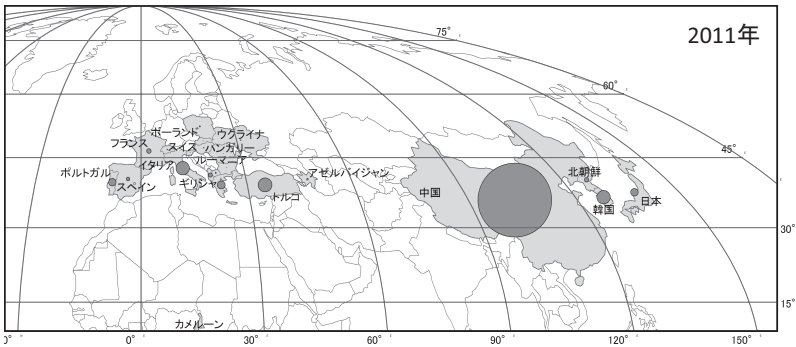


図 4 (続き)

ついて詳述された研究を紹介し、東アジアについては韓国と中国の動向を日本とのクリ需給関連をもふまえて考察する。

3. 温帯ユーラシアの東西のクリ生産の動向を分けた社会経済的背景

3-1. 地中海北岸および南フランスの場合

(1) 地中海北岸地域

地中海北岸地域のクリ栽培については、じゅうらい、ほとんど注目されることがなかった。多くの場合、この地域の農業的土地利用の特徴として公式的に冬雨夏乾燥の気候の下でオリーブやブドウを基本とした多角的な農業の形式が注目されてきた³ (図 5)。

しかし、地理学者のブラーシュはこの地域の農業の成立条件について分析するとともに、クリ栽培の存在および変化について、次のような記述を残している(ブラーシュ/飯塚訳、初版 1940、1964)

「地中海のヨーロッパ側の各海岸は季節的な乾燥に悩まされているけれども、たゞ乾燥的である一方の地域とは異なって、冬と春と秋との間に降りそゞいだ水量は一カルスト的な地方を除いては一地下に持久的な水分の貯へを保有せしめるに十分である。喬木或いは灌木が長い根によって吸ひ上げるのは之である。地中海的な耕作に関しては下層土を大いに考慮しなければならない(p.182)。「これらは灌漑を必要としない植物である。私は如上の諸特徴からして、乾燥した表土と湿潤な下層土とをもつ國々を以って、濃密な耕作と稠密な人口との最古の地中海的形式と看做していゝと考へている。」(183)

「吾が地中海地域に於いて、稠密な人口が特に果樹栽培の地帯内に位置を占

³ 安田(1993)は、地中海農耕の発展段階に関する論文の中でオリーブ栽培の起源と発展の契機が都市文明の誕生と深く結びついていたこと、そしてオリーブ栽培がクリ、クルミ、ブドウなどの果樹利用を伴っていたことを指摘している。ただ、クリについて具体的な言及はしていない。

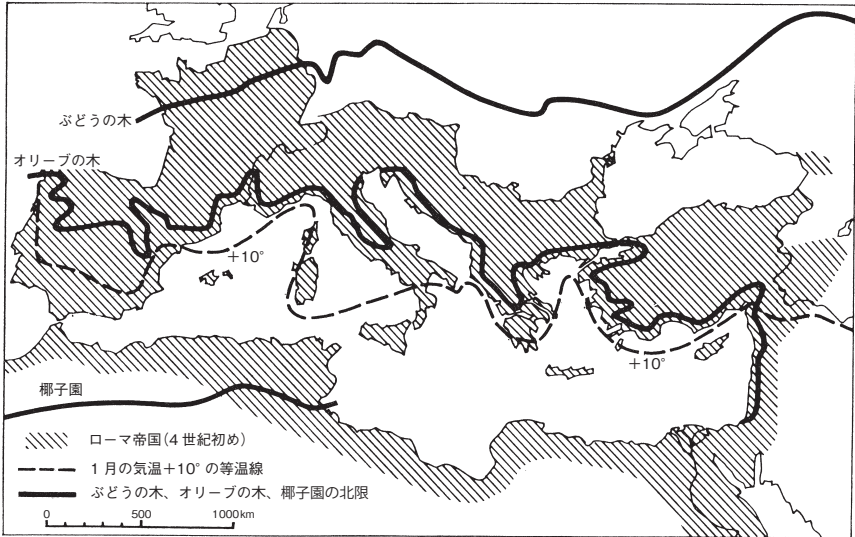


図5 地中海周辺地域の気温分布と主要果樹の栽培限界

(浜名訳, 2004:385 の図より引用)

めるといふことは根強い事実である。(略)南イタリアに於ける如く集中的でありながら、自由に散在している人口の帯が、忠実に大体 200m から 600m の中間にあるオリーブ樹の分布の跡をたどっている。葡萄畑とオリーブ畑とは互に随伴的になっているが、然し葡萄畑は現時の経済的諸原因によって平野地方へ引寄せられつゝある。」(189-190)。

「段階的な栽培様式が最も大きな膨張力を発揮しているのはクリ林の場合であって、少くも地盤の性質が適合していさへすればそれは認められる。クリ林に伴って人口の稠密な地帯も高くなる。クリ林は漸く 400m あたりから認められ始めるのであるが、さらに高く 600 乃至 700m あたりに達しないと之が優勢を占めるには至らない。一條の聚落の列がしばしばオリーブ畑及び之に伴う諸々の栽培がクリ林に地位を譲る限界に合致している(註: Vivarais においては、400m から 500m のあたりでクリ林が桑畑及び葡萄畑を圧倒す

る.)」(190).

「先づ第一段の斜面を蔽っているのはオリーブ樹で、之が560m以上ではクリに代られているのであるが、他方に、平野は恰も小さな矩形の耕地の寄木細工のように展開していて、そこには葡萄が桑や楓の間にうねってをり、之にポプラや柳が加はって風よけを成し、穀類や野菜の繁殖を護っている。そしてこれら全体が、イタリアの最も密度の高い人口の一つを養っているのである。」(196).

「此の食用植物(クリ:筆者補注)のお蔭で、稠密な人口の浪はアベニン、南アルプス並びにセヴェンヌの山腹に於いて最大高度にまで達することが出来た。今日では此等の高地は、石で築き上げて修繕や維持に手の離せない段畑の土盛りのために奪われる労働の余り面倒でもあり辛くもあることから人々の失望を買って、稠密な人口は成りたたなくなってしまうている。かような無駄骨仕事は最早や住民達の能くし得るところでもなく好むところでもなくて、それがために嘗て開墾されていた段畑も上方の部分は、石は崩れかゝり、空しく草の茂るまゝに見捨ててあるといふような光景を呈してゐることが珍らしくない。垂直の方向に進退する一種の潮の干満人口の運動を支配する。人口は嘗て安全さを求め、また屢々健康の適地を求めて、高地に慕ひよった、今日に於いては逆の方向にはたらく引力が優勢である。」(190).

要するに、ブラーシュの記述は地中海北岸の斜面においてブドウやオリーブに対してクリは高度的に棲み分け、標高の高い地域において高い人口支持力を有していたことを明らかにしている。同時に、彼の記述において、当時クリ栽培はすでに高地斜面の立地条件が労働力(減少)問題と関連して後退期にあったことが示唆されている。このこととの関連では、R. ブラッキー(横山訳, 1980)による記述がある。時期は明示されていないが、引用すると以下の通りである。

「技術上の進歩によってイタリアの果実生産は世界でも有数のものとなったが、つねに収穫に大変動をもたらす寄生虫の危険と気まぐれな気候の変化にさらされている。」(141).

「以前、大量に消費されていた果実はクリである。クリの木は山の斜面に多く、今日でもアルプス山脈のとくに西部の渓谷や、アペニン山脈の主として北部の斜面にごく普通に生育している。クリの生産量は数十年前には 60 万トンであったが、いまでは 6 万トンに落ち込んでいる。とくに高価なのはクーネオ産の「マロン」で、製菓業界からの需要がある。」(142)。

「クリの消費が減った理由は(略)何よりもまず山間部の人口が減少し、それにとまってクリの畑の手入れが十分でなくなって、病気(すす病)が広まったことが原因である。さらにタンニンをとるために、クリの木を伐採したことがあげられよう。加えて近年、食習慣がいちじるしく変わったことも手伝っている。」(142-143)。

(2) 南フランス

南フランスの場合も、クリ生産はやはり山間部を中心に大きな役割を果たしていたが、社会の近代化がすすむ過程で急激な減少傾向を辿るようになった。このことについては、森山軍治郎が民俗学の観点から注目した業績が光る(森山, 2000, 2011)。しかし、ここでは社会経済的観点から考察しているピットやプラノールの記述を掲げておきたい。

ピット(手塚・高橋訳, 1998)は、フランス近世の田園地帯における、クリ農業専門化の事例について、次のように記している。

「ルエルグ地方やセヴエヌ山地、ヴィヴァレ地方、コルシカ島などのように、ケイ質岩に富む南フランスの中位山地では、すでに 16 世紀から地域経済が危機的な状況を呈していた。中世に進んだ農業開発は、多くの場合、狭小な段畑でのライ麦(まれに小麦)栽培に立脚していた。その生産性はきわめて低く(1ヘクタール当たり 300~500 キログラム)、16 世紀にみられた人口増加にとうてい対応することができなかった。実を食べるために古くから栽培されていたクリが、大勢の農民に安定した食糧を保証する「恵みの木」となったのは、まさにこの時期のことだった。よく手入れされたクリ園は、1ヘクタール当り約 2 トンの収穫量をもたらした。パンとの栄養的な差異を割引

いたとしても、ライ麦にくらべて3倍ものカロリーを提供したのである。」(90)。

「1464年の課税台帳によると、ヴィヴァレ地方やセヴェンヌ山地の村々では、当時からクリ園の面積がしだいに増加しつつあった。(略)切迫した食糧事情のために、クリの木が成育するまでの期間中、土地を遊ばせておくことは論外だった。こうして15世紀末から16世紀にかけて、成育中のクリ園に穀物を混作するという中間段階が広く認められた。その後、17世紀の初め頃からは、クリの専作が土地利用の大部分を占めるにいたる。このような成り行きは、決して驚くべきことではない。中世以来、フランスの各地で多種多様な樹木が混作という形で栽培されてきたからである。オリーブやクルミ、さらにはモモやリンゴといった液果類など、その種類はじつに多様である。」(90)。

「コルシカ島では、支配者だったジェノバの行政当局が樹木作を積極的に奨励した。コルシカ総督は、1548年の布告で樹木作の拡大を強制的に命じた。すなわち、すべての地主や小作人は、毎年四本の樹木(果樹、桑、オリーブ、イチジク、栗のいずれか)を植えねばならず、さもないと罰金を徴収された。このなかで栗はひじょうな成功をおさめ、コルシカ島の景観を一変させた。それまでコルシカ島を特徴づけていた羊の放牧地は減少し、それに代わって樹園地が増加した。栗園の拡大はとくにコルシカ島の北東部で目立ち、やがてこの地域はカスタニツィア(「栗の里」という名で呼ばれるにいたった。奇妙なことに、支配権をにぎったフランス政府は、この「森のパン」の拡大を阻止しようと試みている。すなわちルイ15世は、1771年に次のような決定を下した。」(94)。

「しかし18世紀の末頃には、クリ栽培で支えることができる人口密度が、一平方キロメートル当たり140人に達した。かくして、島民たちの不満の高まりと、さらにはリムーザン地方でクリ栽培の問題になじんでいたチュルゴールの意見により、官僚的な発想にもとづくクリ栽培禁止の決定が1774年に撤廃され、それから19世紀の末まで、コルシカ島におけるクリ園の拡大が続くことになった。」(95)。

最後に、プラノール（手塚／三木訳，2005）による次の記述も引用しておこう。

「農産物を遠方の市場まで輸送することが可能になったとき，専門化への動きがまず顕著に現れたのは南フランスであった。地中海に面した農村地域での多角的な農業経営は，たしかに早い時期から付近の都市消費市場と結びついて変化し始めていた。たとえば，マルセイユを市場とする周辺の農村地域（プロヴァンス地方の低地農村）では，すでに 19 世紀の初頭から，農業生産の地域分化と専門化の傾向がはっきり認められた。すなわち，アルク川の流域やトゥルブル川上流の丘陵は小麦地帯としての性格を強め，ガーゼ盆地はブドウ栽培地帯，トゥルブル川の下流低地やベール湖の周辺地域はオリーブ栽培地帯として特徴づけられるようになった。（略）しかし，この時期の南フランスでみられた最も著しい変化は，遠隔地市場への出荷と結びついていた。（略）野菜園芸産地や果樹園芸産地が南フランスの各地で形成されたのは，鉄道時代が到来した 19 世紀半ば以降のことである。そのさい，産地形成の核になったのは，都市に近接して古くから存在した灌漑農業地域であった。それまで都市の縁辺部に限定され，農産物の販路も地方市場に限られていた園芸産地が，鉄道時代の到来とともに大きな発展をとげたわけである。」（439）。

「これに対して，穀物生産では自給できないという恵まれない地域が存在した。こうした地域では，異なったタイプの農業経済に向かう必要があった。その一つは，山間地域に人口密度の高い農村を成立させ，きわめて特徴的な性格を示した。そこでの中心作物はクリであった。ケイ酸質土壤に強いクリの木は，地中海側の中位山地や冬が比較的湿和な大西洋側の山地に適していた。その面積当たりカロリー生産量は，管理のよいクリ園の場合，当時における穀物畑の約三倍に達した。クリ栽培が土地の大半を独占し，モノカルチャー的性格を示すにいたった地域も存在した。たとえば，中央山地南東部のセヴェンヌ地方やヴィヴァレ地方である。また，コルシカ島の北東部もそうで，カスタニチア（クリの里）の名で知られている。後者の場合，1770～90 年の地籍図によれば，全農地の 9 割近くがクリ園で占められた。セヴェンヌ地方でも，すでに 16 世紀の半ばから，クリの生産が穀物の 3.5 倍に達していた。」（276）。

以上の引用文から明らかなように、イタリアを中心とした地中海地域やフランス南部では、クリが山間部を中心に、かつては高い人口支持力を担うものとして重要な役割を果たしていたのである。ところが近代化がすすむ過程で、小麦を主とした穀物栽培の拡大、いっぽう農村部からの労働力の流出がすすむ中でクリ栽培は後退傾向を示し今日に至っている。このことは、次に述べるように日本における最近の傾向と類似する。しかしながら、ヨーロッパにおける近年のクリ生産の後退傾向は、クリの消費がなくなったことを意味するものではない⁴。

3-2. 東アジアの場合

東アジアの日本、朝鮮半島および中国ではクリが自生し、その植栽と生産の歴史は古い。しかし、各国間における最近 50 年間についてみると、クリ生産の動向には明瞭な違いが認められる(図 1, 図 2 参照)。日本は 1960 年代から '70 年代にかけてはヨーロッパと対照的に増加傾向を示していたが、80 年代半ば以降はヨーロッパと同様に減少傾向に転じ今日に至っている。いっぽう、韓国の生産量は 1960 年代以降 '70 年代にかけ急速な増加をみせ、その後 '80 年代にも増加を続けてきたが 1997 年をピークとして以後減少傾向にある。これに対して中国の場合は 1990 年代以降増加に転じ、とくにその後半から飛躍的な増加を見せてきた。以下、韓国と中国の生産動向について検討し、その上で日本を含めた 3 国間のクリ流通をめぐる関係について考察する。

(1) 韓国

韓国におけるクリ生産の動向については、農村経済研究院山林政策研究室による「栗の育種と栽培に関する国際セミナー」の資料を抄訳した根岸(2005)に総合的に紹介されている。それによると、第 1 に、韓国におけるクリの生産量(2003

⁴ 北崎二郎氏は、イタリア北部に近接するスイスの「栗の森」におけるクリ拾いやクリ料理を中心とした文化について写真を添え、すぐれたエッセイを記している(北崎, 2005)。本稿では触れなかったがピット(J.-R. Pitte, 1986)の歴史地理学的大著とともに、地中海北岸地域からアルプス山地周辺における根づよいクリ文化の実状を理解するうえで参考になる。

年)は6万トン、生産額は推定1,929億ウォンに達し、クリは単一の作物としては農林産物の中で重要な位置を占めている。

第2に、韓国におけるクリ栽培はクリ栽培農家(2003年現在、28,729人と推定)の95.2%が主産団地に所在し、地域的には国の南部(慶尚南道キョンサンナム・ドに52.5%、全羅南道チョルラナム・ドに21.8%)を中心に分布し、他に忠清南道チュンチョンナム・ド(19.8%)が主産地を構成している。しかし韓国のクリ栽培者の動向からみると、全国的には近年-47%(1990-2003年)と大幅な減少となっており、しかも地域的には全羅南道-57%、慶尚南道-34%、忠清南道-14%と地域差が大きい。これは、じゅうらいのクリの主産団地だった南部地方の減少が著しく、いっぽう中部地方の忠清南道では減少傾向にあるものの、新しい主産団地の形成が進んだことによる。ここではクリの栽培歴が10年以下のものが46.1%を占め、クリ栽培への期待も小さくない。

たとえば、忠清南道チュンチョンナム・ドの公州市コンジュでの聞きとり調査(2009年11月)によれば、クリを活用した農村活力増進事業計画をすすめる結果2009年の栽培面積は全国の9.7%、生産量では13%を占め、年間173億ウォンの収益を上げている。ただ、この新しいクリの主産地においても栽培者数は減少傾向にある。この理由は、FTA 妥結などグローバル化による世界経済の急変や課題に対して地域の対応が立ち後れ、いっぽうクリ生産農家の高齢化(平均63歳)、クリ樹の老齢化(20年以上53%)、クリ栽培土壌の急激な酸性化(80~90%)、および中国栗の輸入増大により価格が下落し、クリ栽培農家の所得は増加が見込めなくなってきたことにある。また近年、山地を開発しクリの栽培面積は増加しているが、山林の景観破壊や山崩れなどが問題となっている(写真1, 2参照)。

第3に、しかし、こうしたなかで、韓国ではクリの国内需要を満たす必要性⁵に加えて、対外的なクリ製品の輸出に関心が向けられている。忠清南道では農林部が、1996年に農産物山地流通センター設置事業および特産物の品質推薦指定事業

⁵ 韓国では、正月にナツメ、くるみ、銀杏、松の実、クリの五つの木の実を食べないと一年は息災に過ごせないという習わしがある。このため、クリを正月まで保存しておかなければならない。昔は屋敷の中庭にキムチなどの漬物を漬けておく瓶置き場があり、その片隅に室穴を掘ってそこに砂を入れてその中に生クリを入れて正月まで保存していた。現在は農協が大型の冷蔵庫に保存して正月に出荷している(現地聞き取りによる)



写真1 山なりに開かれたクリ園



写真2 階段をつくり開園されたクリ園。
(中央部、手前は水田)



写真3 手作業によるクリむき作業



写真4 韓国ではムキグリの消費が多く、
細めな販売がみられる



写真5 イタリアから導入した最新のクリ加工施設の一部



写真6 日本と類似したクリ菓子の生産

をはじめ、扶余郡の新鮮グリが 2003 年にアメリカ FDA 食品成分検査、翌 '04 年に扶余郡共同ブランド(グットゥレ)の使用承認をうけ、さらに '06 年には韓国農林食品輸出入組合から輸出用クリの生産履歴制の指定をうけ、日本、アメリカ、インドネシア、中国などへの輸出推進を図る体制を整えた。いっぽう国内的にはグットゥレ⁶ クリ祭り⁷と称して、クリの販売を促進するため、百済文化祭と連携したクリ拾い体験のイベントを実施している。

最も特筆すべきは、扶余栗営農組合法人(忠清南道扶余郡九龍面太陽里に所在)の対応である。企業紹介書(2008.1.)によると、同法人は 1994 年 6 月に 216 戸の農家を組合員として組織され、850ha、3,000 トン生産を確保して、9 月～10 月に収穫し年中出荷を目指している。

また、マロングラッセ等のクリ加工を目指し韓国初の火焰剥皮ライン、マロングラッセ製造ライン、ピューレ製造ラインを先進地のイタリアから導入して施設整備を図っている(写真 5, 6)。

当社の成立には、2006 年に忠清南道の扶余郡が山林庁のクリ剥皮加工支援事業、2008 年には地域特化技術革新先導企業支援事業—クリ剥皮を利用したクリ加工食品事業—、農林技術開発事業成果活用に伴う技術実施権の確保、さらに日本との間でクリ加工技術移転契約を取り交わすなど、国内外との密接な連携を図っている。この法人では、国内市場のみではなく、Global Market への進出を大きなビジョンとしている。2008 年に中国とインドネシアにおける新しい富豪層を中心としたアジア市場、およびピューレ⁷、クリ羊羹、マロングラッセを中心に日本市場にも進出し、2009 年にはアジア市場占有率を 15% 確保した、さらにピューレやマロングラッセを中心にヨーロッパに進出し、2009 年にはヨーロッパ市場占有率を 5% とし、2010 年には 10% 以上の拡大をめざしている。

当法人がとくにヨーロッパ市場進出を果たしたことは、前章で確認したようにヨーロッパにおけるクリ生産が大幅に減少していることに鑑みると、世界戦略の

⁶ グットゥレ：扶余郡の共同ブランド：自然環境に恵まれた(Good)豊かな土地で生産された最高の農産物の意。

⁷ ピューレ(フランス語の Purée)：野菜や果実を生のまま、または加熱しミキサーなどですり潰し、半液体状にしたもの。料理の付加食材として利用される。

動きとして注目されるのである。

(2) 中国

中国におけるクリの代表品種は板栗⁸として知られている。前述のように、中国の場合板栗を中心としたクリの生産は1970年代には停滞し、1990年代以降飛躍的に増加した。このことについては、中国独自の理由と中国をめぐる国際情勢、とくに日本や韓国とのかかわり合いが複雑に関与していたことを指摘しなければならない。前者については、趙丰才主編『中国栗文化』（2006）に詳細に記されている。その要点は次のとおりである。

すなわち、新中国成立後の大躍進の時期に、クリは食糧不足を補うものとして奨励された。しかし、いっぽうで製鉄用などの燃料として伐採され、また一部の地区では「食糧を元」の方針のもとにクリ林から農地への転用をすすめたため、クリ林の基地面積は激減した。クリ生産がこうした状況から回復し、発展をみたのは1980年代から'90年代にかけてである。市場経済に向けた新しい社会変化のもとで、クリは山区農民の経済作物として採用されるようになった。実際、河北・遷西、湖北・羅田、安徽・金寨、北京・懷柔など、21の「クリの郷」が現れた。いっぽう栽培技術面では品種改良および豊産園のモデル農場を作り整枝、病虫害対策、貯蔵や加工面での支援がなされるようになった。かくして中国は2003年末には、全国の栽培面積110万ha、年間生産量100数万トン、輸出量20万トンに達し、世界最大のクリ生産国となった。

経営的な面からいえば、以上のような中国におけるクリ生産の発展は、山区を中心に昔の粗放経営から基地建設をベースとした集団化経営へと転換の所産であり、いわば1970年代末から始まった改革開放政策を背景とした農村改革によるものであるといえよう。

⁸ 中国国内での栽培と流通は板栗が大部分を占めている。孫歩洲編（1986：224）は、クリの呼称について次のように記している。「俗称板栗，与桃，李，杏，枣并列为我国古代的五果，其树是我国栽培最早的果树之一。栗子，种类较多，一般大者称为板栗，小者称为山栗，小如指盖者称为茅栗。其中以板栗种植最广，通常称之为栗子。板栗根据产地不同，又有北栗和南栗之分」。



写真 7 山地斜面の粗放的な栗園
(1970 年代)



写真 8 栗の放任栽培 (1970 年代)



写真 9 栗の生産基地 (1990 年代)



写真 10 栗祭り (1990 年代)

根岸 訳 (2006) によれば、中国における板栗の栽培は長期間にわたり実生繁殖をした品種が混在して、経営は粗放的で単位面積当たりの生産量が低く、平均 300 kg/ha で、フランスの 11%、日本の 13%、イタリアの 14% と届かない状況であった (写真 7, 8)。こうした中で山東、河北、北京、遼寧、河南、浙江、安徽の各省では 1980 年代から優良品種を接ぎ木して栽植などを適切にしながら土壌を深くし施肥量を増加して、整枝の剪定を実施し、病虫害を防止するなどの技術の改善や収穫時期の適正化などの総合的な措置の実験を進めてきた (写真 9, 10)。山東省の果樹研究所では 1983 年～1985 年の年平均単収は 3,990 kg/ha であったが、移植した接ぎ木の 4 年次で 5,040 kg/ha、6 年次で 8,167 kg/ha、8 年次で 10,882.5 kg/ha の生産を上げた、という。

いっぽう、中国における日本栗の新植のスピードについては根岸(2006)の指摘が興味深い。すなわち彼は、1970年代後半に日本栗の苗木を背負ってクリの栽培技術を指導してきた、能勢の城坂光弥翁が「こんなになるとは夢にも思わなかった。わたらの役目は終わったわ」と、一言漏らされたのが印象に残った、と述懐している。このことは中国のクリ生産の発展には、板栗のみではなく日本栗が、かなり大きな比重をもって取り入れられていることを示唆したものと考えられる。

(3) 日本・韓国との関係

中国におけるクリ生産の急速な伸びについては、国内消費の増加以外に、日本や韓国などとのクリ流通関係に触れなければならない。とくに日本との関わりについては、第二次世界大戦前と中国の改革開放時代では同一ではない。第二次世界大戦前には、『中国伝来物語』によると、中国山東省出身の李金章氏が明治時代、1910年代のはじめ、中国産甘栗を輸入して、東京の浅草で販売したのが最初といわれている。当時は、天津、大連、山東等から輸入されたという⁹。大正時代初期には、毛利、千疋屋などが東京で甘栗の販売を開始し、1914年(大正3)には北沢重蔵氏も甘栗の販売をはじめた。現在の甘栗太郎本舗の元祖である。またほぼ同時期に、甘栗太郎の栗取扱い店として神戸でも佐野回漕店が天津甘栗の販売を開始した。さらに1918年(大正7)には小林洋行が、郷里(長野県出身)の北沢千代蔵氏に指導してもらい、販売を開始した。かくして1920年、東京の池の端で世界万博が開かれたとき、甘栗太郎が実演販売を行い、好評を博した。これを契機に1921年からほぼ15年間は、年間約300トンから400トンの天津甘栗が輸入された。昭和に入ると、大阪の西川商店も天津甘栗の販売をはじめ、1935年(昭和10)年頃には中国栗と朝鮮栗の二種類が輸入販売された。

このように、中国のクリは日本に向けて戦前から輸出され、その流れは今日に及んでいる。中田(1987)は次のように記している。

⁹ 中国栗を、“天津甘栗”として商品化したのは、甘栗太郎本舗の北沢重蔵氏、千代蔵氏、鈴木一平氏、小林照元氏、磯貝博氏、白井三吉氏、柴源一郎氏、藤田清吉氏等第一代の甘栗専業者であるといわれている。

「中国栗と日本栗は、その用途がまったく異なる。中国甘栗は、年間をとおして冷蔵保存ができ、全量焼甘栗として販売される。日本栗は、秋の収穫期に集中して、栗御飯や食品加工用に使われる。日本栗は糖分の注入が可能であるが、中国甘栗は糖分を注入できない。したがってまた、日本市場では、ぜんぜんマーケット競争をしない商品である。むしろ、中国甘栗の輸入販売拡大により栗の消費市場全体が広がれば、日本栗の販売も伸びる関係にある。栗の取り持つ縁で相乗効果がある。」(213)。

ところで、日本では、高度成長期以降クリ生産が減少し加工向けクリの需要が満たせなくなったとき、西南日本を中心に韓国(の南方)からのクリ輸入が続いた(元木, 2008)。

しかし、韓国における日本向け輸出が減少するなかで、商社と華僑が中心になって中国で日本グリの栽培をはじめた。その結果日本国内でのクリの価格は低迷して、クリ生産農家はその余波を受けるようになった。根岸(2005)は、私が初めて1996年(平成7)に初めて中国を訪問し、当時、遼寧省で日本栗が栽培され、そのクリを剥いて大洋漁業が日本に輸入していたことを確認している。しかも、最近ではこれが山東省まで南下してきたという(同氏談)。いっぽう、韓国でも中国山東省に中国式のムキクリ工場を作って、現在では韓国からクリを集荷して中国へもって行き、中国の工場で剥き¹⁰、それを中国から日本へ輸出するというやり方をとっている。この理由について根岸氏は、次のように述べている。

「韓国の栗栽培は戦後、「両班」が解体しないまま土地所有をしているため大地主が栗栽培をしている。日本のように農地解放があれば何チャン農業といえども土地が足かせになってなかなか農村から離れられないのですが、韓国の場合は土地に執着のない農村の小作人は工業化が始まったソウルを始め賃

¹⁰ クリを剥くシステムについては、根岸氏によれば、韓国では日本とおなじに皮栗を家庭に配って内職で剥き、それを回収するやり方であるが、中国の場合は工場に人員を集めて剥くやり方である。一般的には広いホールに作業台をおいてその周りに10人近くの人が囲んで作業台の上におかれた皮栗をピッキングして剥いて、それを水の張った器に収めている。

金の高い都市部に瞬く間に移ってしまい、収穫期にクリを拾ってくれる労働力が確保できないというのが実状でした。200人とか300人とかいう労働力を都市部からバスで送り迎えする姿がみられる。」

以上から、中国におけるクリ生産の突出した発展は、東アジア全体の中でみると中国の経済発展に伴いクリが国内向けに普及・増産されてきたことに加え、国際的にみたときには、経済成長を先行した日本において農山村からの労働力不足が、韓国からの輸入を促し、それを追いかけるように韓国が経済成長を果たし労働力問題に直面するに至って、中国におけるクリ生産あるいは剥きクリ生産を促してきた、という側面も見逃せない点である。韓国におけるクリ生産が減少あるいは日本向けの剥きクリ輸出が困難になってきた背景については、上述の根岸が指摘したように、韓国独自の農村構造に由来する面も見逃せない。しかし韓国におけるクリへの関心(需要)が決して低下していることではなく、より付加価値を高める動きが中国の生産と連携しながら進展しているとみることができる。もちろん、日本においてはより高度なクリ食文化が追求されているが、日本の場合、外国グリへの依存が高まるいっぽうで高級食品のための国内産グリが要望されている(元木, 2010)。

4. むすび

本稿では、クリ生産の世界的な動向(最近50年間)について概観した。世界におけるクリ属は10種とされ、そのうち食用としては中国栗、日本栗、ヨーロッパ栗、アメリカ栗に4分類されるが、アメリカ栗は壊滅的な状況にあり、今日、生産の大部分はユーラシアの東部と西部に発展してきた。1961年当時はヨーロッパが東アジアを凌駕していたが、それ以降の世界の経済成長と経済のグローバル化が進行する中で、両者の関係が逆転し、東アジアがクリ生産において圧倒的比重を占めるようになった。とくに中国におけるクリ生産は1990年代以降飛躍的に増加し、2011年現在の世界のクリ生産量は'61年当時の3倍以上に達している。東アジアの域内でみると中国の台頭は、クリ生産の比重が日本から韓国、さ

らに韓国から中国へという生産地の移転の過程と軌を一にして実現したといえる。したがって単に中国独自にクリ生産が激増したわけではない。いっぽう、ヨーロッパにおけるクリ生産の後退傾向については、近代化の過程で '60 年代以前からみられたことで、その意味では世界のクリ生産の変容プロセスは、ヨーロッパで先行し、東アジアがそれに続く構図となっていることが明らかとなった。

謝辞 本稿作成にあたり、貴重な文献を提供をいただきましたご教示を賜った栗研究所の根岸忠司氏、現地調査では中国科学院地理研究所（現・中国科学院地理科学与資源研究所）の郭煥成教授および韓国公州大学の鄭還泳教授の各位にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【文献】

- 北崎三郎 2005, スイスの秋色. SKYWORD 10, 54-64.
- ジャン＝ロベール・ピット (手塚 章・高橋信夫訳) 1988. 『フランスの文化と風景 下』, 東洋書林.
- グザヴィエ・ド・プラノール (手塚 章/三木一彦訳) 2005. 『フランス文化の歴史地理学』, 二宮書店. (Xavier de Planhol. 1988. *Geographie historique de la France*. Fayard (Paris).
- 田中輪一郎. 1933. 『栗の栽培法』 (1935 訂正再版), 明文堂.
- 中尾佐助 1978. 『現代文明ふたつの源流』, 朝日選書 (朝日新聞社).
- 中川昌一・湯田英二・堀内昭作・松井弘之共訳 1989. 『温帯果樹園芸』, 養賢堂. (Melvin N. Westwood 1978. *Temperate-Zone Pomology*. W. H. Freeman and Company, New York).
- 根岸忠司抄訳 2005. 韓国の栗栽培および生産現況. (原文日本語訳: キムソンチャン 編: 栗の育種と栽培. 国立山林科学院山林資源部).
- 2006, 中国板栗の生産及び研究現況 (未公表).
- 農文協編 2000. 『果樹園芸大百科 7 クリ』, 農山漁村文化協会.
- 浜名優美訳 2004. 『フェルナン・ブローデル 地中海 I 環境の役割』, 藤原書店.
- ブラーシュ/飯塚浩二訳. 初版 1940, 1964. 『人文地理学原理 上巻』 岩波書店.
- ブラッキ R. (横山 正訳) 1980. 『全訳世界の地理教科書シリーズ 19 イタリア』 帝国書院.

- 元木 靖 2007. 日本列島におけるクリと人間とのかかわり合い. 立正大学『経済学季報』57 (1・2), 105-125.
- 2008. グローバル経済下における日本のクリ生産の動向と栽培技術革新. 立正大学『経済学季報』58 (1), 99-130.
- 2010. 中部日本におけるクリ菓子産業の地域的集積. ——小布施町と中津川市の比較——. 立正大学『経済学季報』59 (3), 27-58.
- 森山軍治郎 2000. 山間部フランスのクリと近代——食生活の偏見と栽培の意味——. 専修大学北海道短期大学紀要 (人・社編) 33, 347-398.
- 2001. 近代フランスのクリ民族誌——環境・食生活・民俗をめぐって——. 専修大学北海道短期大学紀要 (人・社編) 34, 211-270.
- 安田喜憲 1993. オリーブ栽培の起源と発展. 佐々木高明編『農耕の技術と文化』, 集英社, 503-508.
- 孙步洲編 1986. 『中国土産大全』, 南京工学院出版社.
- 赵丰才主編 2005. 『中国栗文化初探』, 中国农业出版社.
- Jasper Guy Woodroof 1979. *Tree Nuts: Production Processing Products (Second Ed.)*. AVI Publishing Company, INC. (Westport, Connecticut).
- Jasper Guy Woodroof 1979. *Tree Nuts: Production Processing Products (Second Edition)*. AVI Publishing Company, INC. (Westport, Connecticut).
- Jean-Robert Pitte 1986. *Terres de Castanide: Homones et paysages du Châtaignier de l'Antiquité a nos jours*. Fayard. (Paris).

Trends and Socioeconomic Background of Chestnut Production in Two Major Zones of Eurasia

Yasushi MOTOKI

Chestnut belongs to the *Castanea* genus of the Fagaceae family. The global production of edible chestnut since the 1900s mostly remains in East Asia and mediterranean Europe. Statistical production and time-space trends in both regions are analysed for the last 50 years. Overall production decreased in the European countries and increased in East Asian countries. China's fast increase is noteworthy after the 1990s, other countries are stagnant. To elucidate a unified socioeconomic background, typical examples of Italy and the south of France were introduced, together with the situation of Korea and China, including trade relations between Korea, China and Japan.

【Keywords】 global chestnut production, time-space trends, Eurasia, east Asia, mediterranean Europe